愛知県南知多町

天神山遺跡

TENJINYAMA SITE

縄文時代前期初頭の発掘調査

Archaeological Research on the Initial part of the Early Jomon Period

2022

南山大学 上峯篤史研究室

UEMINE Atsushi Lab
for Archaeology & Archaeological Science,
Nanzan University, Nagoya, Japan

愛知県南知多町

天神山遺跡

TENJINYAMA SITE

縄文時代前期初頭の発掘調査

Archaeological Research on the Initial part of the Early Jomon Period

2022

南山大学 上峯篤史研究室

UEMINE Atsushi Lab
for Archaeology & Archaeological Science,
Nanzan University, Nagoya, Japan

Published by
Atsushi UEMINE Lab for Archaeology & Archaeological Science
Nanzan University, 18 Yamazato-cho, Showa-ku, Nagoya 466-8673, Japan

Copyright © Atsushi UEMINE 2022

例　言　Foreword

1　本書は，天神山遺跡（愛知県南知多町大字大井字入道）の学術発掘調査の成果である。

2　発掘調査は南山大学上峯篤史研究室が調査主体となり，2021 年 7 月 22 日～ 8 月 8 日の期間に実施した。調査面積は 12 ㎡である。

3　発掘調査は上峯篤史（南山大学人文学部人類文化学科准教授）の指導のもと，堀内祐花（南山大学大学院生）が主任を務め，以下の参加者と調査を遂行した。加藤大智，佐々木彩乃，岡智康（以上，南山大学大学院生），鈴木しゅん菜，村井咲月，村瀬早紀，吉田真優，藤代陽向，村田桃子（以上，南山大学学生），飯塚寿音，岩月佑真（南山大学卒業生），南山大学「考古学実習 A」受講生，廣瀬允人，須賀永帰（以上，名古屋大学大学院生），浅井飛音（名古屋大学学生）。

4　発掘調査の実施において，愛知県教育委員会および南知多町教育委員会から御指導を賜った。増子康眞氏，坂野俊哉氏，門脇誠二氏，長田友也氏，川添和暁氏，鵜飼堅証氏，小栗康寛氏からは，天神山遺跡や出土遺物について，有益な御教示ならびに御配慮を頂いた。

5　遺物のうち土器の整理作業は主に堀内，藤代，村田が担当し，土器の洗浄および注記作業の一部を第一合成株式会社に委託した。石器の整理作業および調査記録の解析は，村瀬の協力を得ながら上峯・加藤が担当した。図化や写真撮影作業においては，青野舜，吉川主浩（以上，南山大学大学院生）の協力を得た。

6　本書は，堀内が土器の記載，加藤が石器の記載およびすべての表作成を担当し，上峯がこれを校閲した。その他の執筆および全体の統合・編集は上峯が担当し，加藤が補佐した。

7　発掘調査の記録，写真等は南山大学上峯篤史研究室が保管している。出土遺物は南知多町教育委員会に移管予定である。

Abstract

The archaeological record of the transition from the Initial to Early Jomon period (ca. 8400 to 7000 cal BP) has been expected to record how the human groups were influenced by the K-Ah eruption (ca. 7300 cal BP) occurred in southern Kyushu. Thus, attention has been paid to the disappearance of archaeological sites, the structure of settlements, and the movement of artifacts at that time. In this study, we approached this issue from the excavation of the Tenjinyama Site located in Minami-chita Town, Aichi Prefecture. The site is located in the southern part of the Chita Peninsula, on the slope of a small hill formed by Neogene strata. In this excavation, three trenches were set up along the slope from the eastern edge of the site. In the A-trench and B-trench, which are located at the upper part of the slope, the Neogene layer was appeared just below the modern sediment, and the Jomon period sediment was considered to have been washed away. In the C-trench below the slope, a black soil layer containing a large amount of small pieces of Shioya type pottery (one of the typical pottery of the the initial part of the early Jomon Period) was detected. Based on the observation of the sediments and the sorting and roundness analysis of the pottery pieces, it was concluded that these were flood deposits brought from upslope. The habitation area of the human group is estimated to have been located near the ridge line above the slope. The scale and dynamics of the site are assumed to be common to Jomon sites in western Japan, and it is not appropriate to find serious effects of the K-Ah eruption on the initial part of the early Jomon Period in the southern Chita Peninsula.

目　次　Contents

1. 研究の背景　Background ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2. 研究の対象　Material ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
（1）知多半島南部の地形・地質と縄文時代遺跡の立地
Geological setting of the site
（2）天神山遺跡における既往の学術成果
Research history of the site

3. 研究の方法　Method ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（1）発掘調査の方法　Excavation
（2）整理作業と図化等の方法　Lab work
（3）縄文土器片の画像解析
Image analysis of Pottery pieces

4. 発掘調査の成果　Result ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（1）A・B トレンチの層序と遺物
Stratigrapy and Artifact of A and B-tr.
（2）C トレンチの層序と遺物
Stratigrapy and Artifact of C-tr.
（3）土器および土製品
Pottery and Cray Object
（4）石器　Lithic Artifact
（5）縄文土器片の分級度と円磨度
Sorting and Roundness of Pottery pieces

5. 天神山遺跡の遺物包含層と遺跡形成 ・・・・・・・・ 13
Disucussion: Formation process of the Tenjinyama Site

註　Endnote
引用文献　References
写真図版　Plates
報告書抄録

挿　図　・　表　目　次　Index of Figures and Tables

Fig. 1　知多半島南部の地質と縄文時代遺跡の分布　Geological Setting of archaeological sites of Jomon period at the southern part of Chita Peninsula ・・・・・・・ 2
Fig. 2　天神山遺跡の現地形と発掘調査トレンチの配置　Current topography around the Tenjinyama Site and excavation trenches ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
Fig. 3　天神山遺跡の地層　Stratigraphy of excavation trenches at the Tenjinyama Site ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
Fig. 4　天神山遺跡の土器（1）　Pottery pieces from the Tenjinyama Site (1) ・・・・・・・ 8
Fig. 5　天神山遺跡の土器（2）　Pottery pieces from the Tenjinyama Site (2) ・・・・・・・ 9
Fig. 6　天神山遺跡の土器と土製品　Pottery pieces and clay object from the Tenjinyama Site ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
Fig. 7　天神山遺跡の石器　Lithic artifacts from the Tenjinyama Site ・・・・・・・・・・・・・・・ 11
Fig. 8　天神山遺跡の土器片の面積（ヒストグラム）　Histogram of pottery piece's area from the Tenjinyama Site ・・・・・・・・・・・ 12
Fig. 9　天神山遺跡の土器片の円磨度　Roundness of pottery pieces from the Tenjinyama Site ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

Table 1　天神山遺跡の発掘調査の経過　Process of the excavation at the Tenjinyama Site ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Table 2　天神山遺跡の土器・土製品観察表　List of pottery pieces and clay object from the Tenjinyama Site ・・・・・・・・・・・・・・ 17
Table 3　天神山遺跡の石器観察表　List of lithic artifacts from the Tenjinyama Site ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

1. 研究の背景

2021 年 8 月に小笠原諸島・福徳岡ノ場で発生した海底火山の噴火は，約 1400km も離れた沖縄本島に多量の軽石を漂着させ，今なお，船舶の航行，漁業，観光等に深刻な影響を与えている。2022 年 1 月には南太平洋の島国トンガ付近で海底火山が噴火し，火山灰や津波が被害状況の把握さえ困難な状況をもたらしている。環太平洋造山帯に暮らす私たちにとって，火山活動の活発化がカタストロフィを引き起こしかねないことが改めて痛感される。

各地の遺跡で散見される広域降下火山灰は，認識当初は遺物編年研究の「鍵層」として着目されたが（町田ほか 1976・1978），良好な研究条件が整った地域や遺跡では，具体的な火山災害事例や環境の変化，それに対する人間集団の反応が関心を集めてきた。特に縄文時代に関しては，九州南端の海底火山に由来する鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）を用いた広域編年や，噴火や火山灰の降下が各地にもたらした影響が議論され，土器型式の系統論や遺跡分布など，考古学の伝統的な関心を具体的に深めている（桒畑 2016）。そして本研究が取りあつかう知多半島周辺の諸遺跡も，この種の議論にとって格好の舞台となってきた。1955 年頃から，知多半島南部の縄文時代遺跡群が相次いで発見・調査され，早期後葉から前期初頭の土器編年が整備された。天神山遺跡や塩屋遺跡の層位的出土事例は，滋賀県石山貝塚の土器編年（坪井ほか 1956）の追認や新型式の抽出（紅村 1963，磯部ほか 1965）をうながし，東海条痕文系土器の編年観を確立させた（増子 1975）。先苅貝塚（山下編 1980）で見いだされた海進の証拠と K-Ah が，海進や降下火山灰に対する適応行動として土器系統や遺跡消長の見直しにつながったのは必然である。東海地方西部の遺跡が天神山式期に激減し，塩屋式でほとんど途絶える要因が，K-Ah に求められた（山下 1987）。

三方を海に囲まれた小天地たる知多半島の地形は，海水準変動や古地形変遷への関心を喚起し，早期後葉から前期初頭の遺跡立地の把握や類型化をうながした。山下（2005・2008）の整理によれば，①内湾を望む丘陵地中腹の，斜度 20 ～ 25 度の小凹地状の斜面に遺物包含層が形成され，②貝塚ではなく，③多量の土器を包含する歴代の包含層が整然と堆積する。そして，④同一丘陵の尾根をはさむ東西もしくは南北の両斜面に，同一時期の遺跡が対をなすように立地する。①は海進への適応（磯部ほか 1965）や「岩陰のような特殊な立地」（増子 1981：51），②は海進にともなう採貝地の消滅，③は廃棄物の集積（山下 1997），として説明されてきた。④には「十数人からなる一遺跡形成集団単位」の「協働」とする説明がある一方で（増子 1981：51-52），中期前葉の山田平遺跡（山下 1997）と同様に，台地尾根上の平坦地に居住域を想定して，両側斜面の遺物包含層を「同一遺跡の別地点」とする理解もある（山下 2005：221）。後者は「天神山塩屋遺跡群」や「向畑新津遺跡群」を拠点的な遺跡，低地に点在する小規模遺跡をキャンプサイトと位置づける。

近年では，K-Ah の降下年代が 7300 cal BP 頃に落ち着き（福沢 1995，Smith et al. 2013），その降灰期は楠廻間式期まで遡っていて（遠部ほか 2008），塩屋式期の集落の断絶や木島式土器の東海地方東部への進出（池谷 2009）と関連づけにくくなっている [1]。かつて土器編年の構築に貢献した多層遺跡において，K-Ah の影響をとらえる遺跡証拠を探索する段階が訪れている。また知多半島南部の遺跡立地に端を発する集落論・集団論の論点は，台地上に居住域が想定できるか否か，あるいは遺物を多量に包含する斜面堆積物の成因をどのように考えるか，という点に帰着する。「学史的な遺跡」を研究の前線に据え，遺跡と遺物がなす関係態を再検討する作業が要請されるのである。筆者らが 2021 年夏に天神山遺跡の発掘調査を企画した意図は，まさにこの点にある。

2. 研究の対象

(1) 知多半島南部の地形・地質と縄文時代遺跡の立地

愛知県西部から南に突き出た知多半島は，伊勢湾と知多湾・三河湾に囲まれ，南北約 40km におよぶ，丘陵性の半島である（Fig. 1）。松田博幸（1969）は，河和 - 野間線以南に五つの地形面を見いだしている。そのうち，内福寺 - 野間線以南の標高約 60-100m 付近が最上位の師崎小起伏面，知多半島北端から師崎まで連なる標高 40-60m 付近の丘陵が横須賀小起伏面である。ともに浸食面で，前者は中新統師崎層群のうちの内海累層や山海累層からなり，後者は豊浜累層および東海層群下部の豊丘累層から構成される。両者の地質差，とりわけ岩石の固結度の違いが差別浸食をうながし，両地形面の比高差を生み出したと考えられている（近藤ほか 1987）。

伊勢湾側の内海地区では，山体を浸食してできた谷に先苅貝塚（早期中葉）が営まれ，縄文海進にともなって埋没している。海進の最盛期の汀線に程近い緩斜面上および海退にともなって形成された砂堆上は，清水ノ上貝塚（早期後葉～前期）や乙福谷遺跡（中期前葉），林ノ峰貝塚（中期～後期），下別所遺跡（後期後葉～晩期）など，前期以降の人類活動の場となった。これらの環境変動と遺跡の動態は，縄文海進の年代と海水準変動に関する研究の定点となっている（松島 1983）。

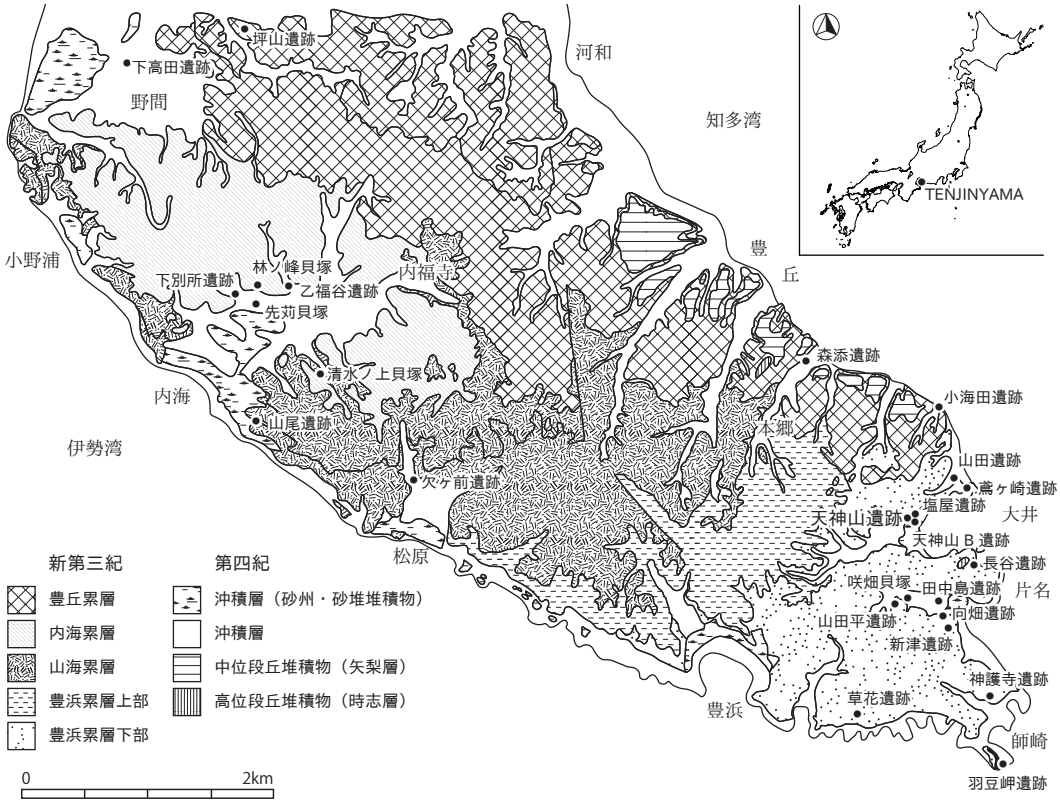


Fig. 1　知多半島南部の地質と縄文時代遺跡の分布

Geological Setting of archaeological sites of Jomon period at the southern part of Chita Peninsula

知多湾側には海成の中位段丘面群が発達し，特に連続性のよい矢梨層（牧野内 1980）からなる面は，海洋酸素同位体比ステージ（MIS）5e に形成されたと考えられる（海津 2001）。縄文時代遺跡は，これらの中位段丘面を背負った沖積面に点在し，豊丘地区の森添遺跡（中期前葉），大井地区の小海田遺跡（早期後葉），山田遺跡（後期後葉～晩期）などが知られる。鳶ヶ崎では標高約 10 ～ 20m の範囲に，MIS5e に対応する海成段丘面とさらに上位の面が見いだされている。この面の斜面が，鳶ヶ崎遺跡（中期中葉）として知られる。

本郷 - 豊浜線以南は豊浜累層からなり，特に大井 - 豊浜線以南には同層の下部層が顕著に認められる。大局的には知多半島先端の羽豆岬にむけて傾斜する地形で，豊浜や片名，大井などでは開析が進んで，樹枝状の谷が沖積面に接続する。大井地区では狐塚～下二本松にかけての，標高約 40m の平坦地が MIS9 に形成された海成段丘面と考えられていて，漂白されたチャート亜角礫をまじえる赤褐色土層を載せる。この段丘面の南側には標高約 20m の定高性のある丘陵が張り出していて，その先端の東斜面に塩屋遺跡，天神山 B 遺跡，西斜面に天神山遺跡が立地する。天神山遺跡の 1956 年調査で熱田層に対比された礫層が検出されており（小澤ほか 2018），中位段丘面に相当する堆積面が付近に存在したと考えられる。

片名地区も縄文時代遺跡の密集地で，豊浜累層下部層からなる丘陵の斜面に，新津遺跡（早期後葉），山田平遺跡（中期）が立地し，麓の沖積地には咲畑貝塚（中期中葉～後期前葉）が営まれている。師崎地区の神護寺遺跡（後期前葉），豊浜地区の草花遺跡（中期後葉）も，同じく豊浜累層下部層で構成される丘陵に立地する。

（2）天神山遺跡における既往の学術成果

天神山遺跡は愛知県南知多町大字大井字入道に位置し，付近の基盤地質を構成する豊浜累層の凹部に形成された，斜面に立地する。1950 年代には階段状の畑地がひろがっていたようで（紅村 1963），今もそのなごりがうかがえる。

戦後の学術調査の隆盛が愛知県内の縄文時代貝塚にスポットライトをあてていくなかで，1955 年 4 月の天神山遺跡の発見が，知多半島に点在する縄文時代遺跡群の徹底調査の嚆矢となった。同年 8 月には試掘調査が実施され，縄文時代早期後葉から前期初頭にかけての土器群が得られている（立松ほか 1983）。翌年始には紅村弘を現地担当者として，本格的な発掘調査が実施されている（岩野 2002，坪井 2002）。紅村（1963）は，上ノ山式，入海式，石山式，天神山式，塩屋式がこの順に層位的関係をもって出土したと記載しており，試掘調査の所見（立松ほか 1983）もこれと矛盾しない。同じ丘陵の東側斜面に位置する塩屋遺跡（磯部ほか 1965）とともに，当該期の東海系土器の編年研究に寄与した。

天神山遺跡は研究史上で重要な位置を占める一方で，1956 年の本発掘調査で得られた資料の公表は一部にとどまり（紅村 1963・1978 など），土器型式の層位的関係を検証しうる情報は共有されていない。しかし近年では状況が改善に向かいつつあり，川添和暁は 1956 年調査に関わる文書（行政文書および調査関係者のメモ）を読解して，調査トレンチや層序の復原を試みている（小澤ほか 2018）。出土遺物の整理作業も名古屋大学博物館で進行していて，中間成果が発表されている（堀内ほか 2021）。

3. 研究の方法

(1) 発掘調査の方法

調査地に打設された境界杭を測量の基準点とし，大井地区小浜に設置された 1 級水準点（A405）を基点に，オートレベル（シンワ測定製 SA-24A）にて直接水準測量を実施して，基準点の標高を求めた。基準点の位置情報（X･Y 座標値）は，1 周波型受信機（Emlid 社製 Reach RS）および RTK ポール（マイゾックス製 RCP-300J）を使用した GNSS 測位によって求めた。各基準点で約 60 ～ 120 分測位を続け，「RTKLIB（ver.2.4.3）」を使った後処理キネマティック（PPK）解析によって値を算出した。処理の手順は坂本ほか（2019）にしたがったが，TS（STS 製 TSS-200GS）による測量成果との整合性を根拠に，受信衛星は GPS のみ，FIX 解のうち ratio が 999.9 を示した最終解を最確値として採用した。この最確値を基準に，TS による測量結果を平面直角座標系の座標値にアフィン変換した。変換には「楽らく測量！基準点セット（ver.6.2）」を用いた。このアフィン変換による残差は，X 方向・Y 方向とも約 2cm であった。

発掘調査区は，大井まちづくり協議会による遺跡解説看板付近に設定した（Fig. 2）。看板北東の斜面に A トレンチ（1 × 3m），南西の平坦地に B トレンチ（2 × 2m），平坦地を西側に下った緩斜面上に C トレンチ（1 × 5m）を設置し，TS で位置を記録した[2)]。掘削には主に三角ホーを使用し，C トレンチの土器片密集部分では移植ごてや樹脂製ヘラを併用した。縄文時代遺物が出土した C トレンチでは，一部の遺物は TS によって三次元位置情報を記録したが，出土点数が膨大であったため，多くの遺物は 5cm ごとに設けた各層の深度区分と，1m ごとの地区割りの情報（東から順に 1 ～ 5 区）をもたせて回収した。発掘調査の経過は，Table 1 のとおりである。

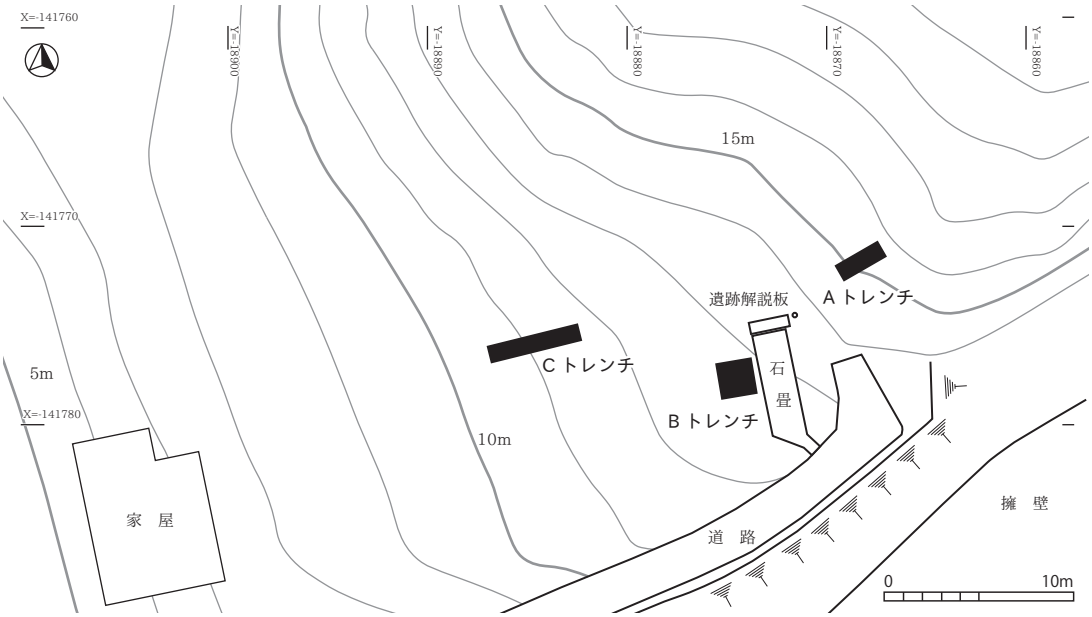


Fig. 2　天神山遺跡の現地形と発掘調査トレンチの配置
Current topography around the Tenjinyama Site and excavation trenches

Table 1　天神山遺跡の発掘調査の経過　Process of the excavation at the Tenjinyama Site

日付	工程
7/21	南知多町教育委員会経由で発掘調査許可書類（7/17 ～ 8/8）を受領。
7/22	調査予定地の草刈り。直接水準測量。
7/23	A・B トレンチを設定。両トレンチとも一部で基盤層に到達。「考古学実習 A」受講生が調査に参加。
7/24	A・B トレンチ全面で基盤層を検出。B トレンチ北西の藪で土器片の散乱を確認。1 × 1m の試掘坑から，土器片が多数出土。「考古学実習 A」受講生が調査に参加。増子康眞氏，板野俊哉氏，小栗康寛氏来跡。
7/25	A・B トレンチ，試掘坑の写真撮影。A・B トレンチは土層断面図作成後，埋め戻す。試掘坑を西に 4m 拡張し，C トレンチとする。増子康眞氏，板野俊哉氏，長田友也氏，川添和暁氏，鵜飼堅証氏来跡。
7/28	本日以降，C トレンチを精査。トレンチ全体で 3 層を検出。
7/29	1 区は 10 ～ 15cm，2 ～ 5 区は 3 層上面から約 5cm 掘削。
7/30	1 ～ 2 区は 3 層上面から 10 ～ 15cm，C3 ～ 5 区は 5 ～ 10cm に到達。
8/1	1 ～ 2 区は 3 層上面から 10 ～ 20cm，3 区は 10 ～ 15cm，4 区は 5 ～ 10cm まで到達。C5 区の 2 層最下部で石錘 (S8) と瓦を回収。一部で 4 層を検出。
8/2	1 区は 3 層上面から 20 ～ 25cm，3 区は 15 ～ 20cm，4 区は 10 ～ 15cm まで達する。
8/3	C トレンチの精査を継続。土器の回収に時間を費やす。
8/4	C トレンチの精査を継続。
8/5	1 区は 3 層上面から 25 ～ 30cm，4 区は 20 ～ 25cm，5 区は 5 ～ 15cm まで到達。大井まちづくり協議会会員来跡。
8/6	精査および写真撮影。
8/7	1 区は 3 層上面から 35 ～ 40cm に達する。3 ～ 4 区では 4 層下半部に到達。南知多町教育委員会社会教育課職員来跡。
8/8	石鏃（S1）及び環状土製品（C124）を回収。土層断面図を作成。大井まちづくり協議会会員来跡。写真撮影後，埋め戻し。

（2）整理作業と図化等の方法

出土遺物は南山大学に搬出し，土器片の洗浄および注記作業ののち，3 層と 4 層のものを中心に接合作業を実施した。型式が判断できる土器片は，可能な限り採拓した。断面実測では，Open Technologies 社製光学式 3D スキャナ SCAN in a BOX によって作成した 3D データを下図とした。スキャン後，スキャナ制御ソフト IDEA（1.1 SR8 Standard version）で点群データからノイズを除去し，PLY ASCII 形式のメッシュデータを作成した。メッシュ化の際にはスムージング処理は施さず，点群データの局所的な不足を補正するための穴埋めも最小限とした。得られた PLY ファイルを 3D データ処理ソフト CloudCompare（ver. 2.11.3）で法線計算し，土器断面の正斜投影（オルソ）画像を出力した。大きさの情報はスキャン時に取得されたものに依拠した。これを Adobe Illustrator (ver.26.0.2) においてトレースし，断面実測図を得た。石器についてはすべて手作業で実測，製図した。

実測図を作成した資料に，いくらかの未実測資料をくわえ，鮮明な写真を撮影した。Nikon 製デジタル一眼レフカメラ D850 に AF-S Micro NIKKOR 60mm f/2.8G ED を装着し，三脚を用いて真俯瞰撮影した。撮影の際にはフナコシ製画像補正用カラーチャート CASMATCH を写しこみ，これを基準に Nikon Capture NX-D（ver.1.4.6）や Adobe Photoshop（ver.23.1.1）で色調を補正した。

（3）縄文土器片の画像解析

C トレンチにおける堆積構造と堆積物としての縄文土器片の様態とを明らかにする目的で，以下の解析を実施した。デジタル一眼レフカメラ（Nikon 製 D7100）にレンズ（Nikon 製 AF-S VR Micro-Nikkor 105mm f/2.8G IF-ED）を装着し，三脚に据えたのち，撮影台として用いたトレース台の光度とカメラの露出設定を調整し，逆光で黒く潰れた土器片の写真を撮影した。Adobe Photoshop（ver.23.1.1）で歪曲収差の補正とピクセル数を 1024 以下に調整したのち，画像解析ソフトウェア ImageJ Fiji（ver.1.53c）で読み込み，面積（Area），真円度（Circ），アスペクト比（AR）を求めた。これを Takashimizu et al.（2016）が提案する計算式にしたがって，円磨度指標 R に変換した [3]。

4. 発掘調査の成果

(1) A・B トレンチの層序と遺物

A トレンチでは地表面から約 60cm，B トレンチでは約 40cm で基盤層に達した。基盤層はシルト岩で，岩相および走向･傾斜を A トレンチ南側の露頭や既報のデータ（近藤ほか 1987）に照らし，豊浜累層下部の構成層と判断した。本層に由来する岩片が，上位の堆積物にも最大長 10cm 以下の大きさでふくまれ，下位層（2 層）では面積割合で約 7%，上位層（1 層）では約 3%であった。

A・B トレンチとも，1・2 層から現代の廃棄物（鉄釘，ビニール片等）が出土し，堆積年代はごく近年と考えられた。これらとともに，近代の陶磁器片，瓦片等，年代不明の土器細片が少量出土している。B トレンチでは，基盤層直上に厚さ 3cm 前後の黒色土の薄層が部分的に依存していた。著しく摩耗した縄文土器の細片が若干数出土しており，層相からは C トレンチの 3 層と対比できる。

(2) C トレンチの層序と遺物

すでに地表面に縄文土器片が散乱しており，地中からも多数の土器片が出土した。最深部で約 1m 掘削したが，遺物の出土が止まず，調査期間内には無遺物層や基盤層までは到達できなかった。

最下層（4 層）は灰黄褐色の細粒砂層で，基盤層由来のシルト岩片を下半部で約 10%，上半部で約 40%ふくみ，明瞭な逆級化構造を見せる。その上位には，極細粒の堆積物が掘削に難儀するほどに固く締まった黒色土層（3 層）が堆積する。本層にも，シルト岩片は約 15%ふくまれる。4 ～ 3 層ではシルト岩片や礫等が東に傾斜する覆瓦状構造を見せており，斜面上方からもたらされた堆積物であることは明らかである。本層を 2 層と 1 層が覆い，現地表面に至る。

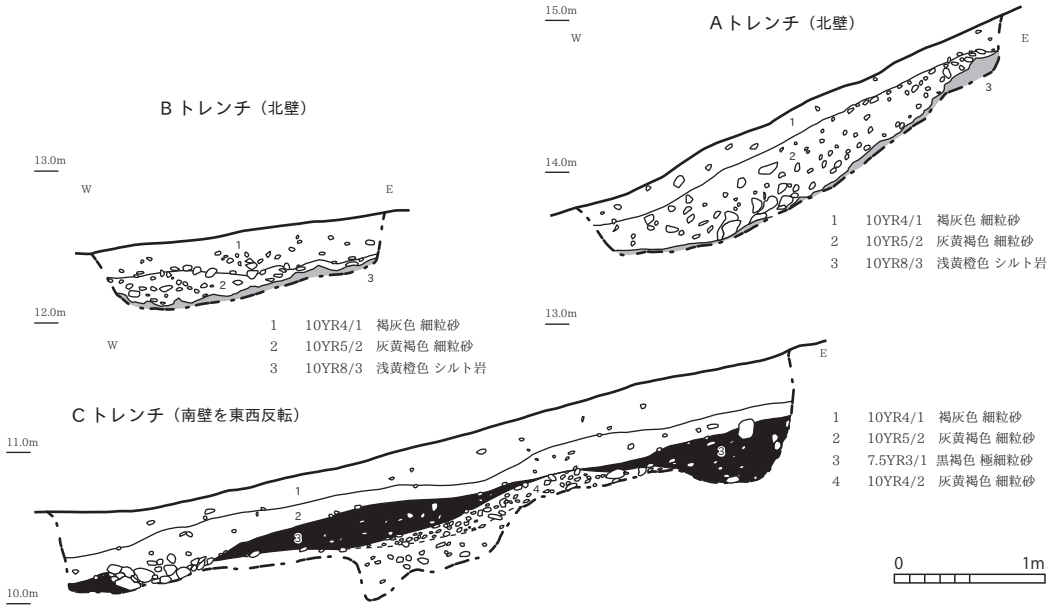


Fig. 3　天神山遺跡の地層　Stratigraphy of excavation trenches at the Tenjinyama Site

縄文土器片はすべての層から出土したが，3 層以下は現代の廃棄物をまじえない。また 3 層は上位の 2 層との区分が明瞭で, C トレンチ西端の 5 区では, 2 層最下部に角礫の集積が見いだされた [4]。2 層以上と 3 層以上の堆積年代の隔絶は明らかで，3 層以下を縄文時代の遺物包含層と見なした。

(3) 土器および土製品

縄文土器は表土をふくむすべての層から出土しているが，型式が判別できるものはすべて，入海 0 式から塩屋式の範疇に収まる。器面が摩耗した小片が多く，約 30 日の接合作業の成果物も 15 組にとどまった。3 層以下の出土品 5295 点の様相は，次の通りである（Fig. 4 ～ 6）。

C1・C2 は，口縁部に隆帯を貼り付け，隆帯に上下交互押圧が施された土器で，入海 0 式（上ノ山Ⅱ式）にあたる。2 点のみの出土で，どちらも口唇部には表裏から交互に押圧が施されている。

C3 ～ C8 は，口縁部に貼り付けられた隆帯上に刻みが施された土器で，入海Ⅰ式に相当する。6 点出土していて，隆帯は 1 条しか確認できないものが多いが，C8 は複数の隆帯をもつ。隆帯上には施文が確認できるが，器面の摩耗が激しく，隆帯の形状や施文の詳細はとらえられなかった。

C9 ～ C18 は，口縁部に低い隆帯を貼り付け，隆帯上に密接して刻みが施された土器で，入海Ⅱ式にあたる。10 点確認できる。C17 は「7」字状の隆帯をもち，下から上に押し上げるように，先鋭なヘラ状工具を用いて刻みが施される。C18 の胎土には繊維が顕著に見られる。

C19 ～ C25 は，口縁部に隆帯をもたず，爪形の刺突が施された土器で，石山式に分類できる。7 点出土していて，刺突はどれもヘラ状工具によるが，その配列は横位一列のものと，波状のものとがある。C25 の胎土には，繊維が多くふくまれる。

C26 ～ C41 は，器面に条痕が施された土器を一括した。C26 には植物性の工具による櫛描状の文様が確認でき，天神山式に分類できる。このほかの 15 点は，器面の摩耗のため，条痕の目的や文様構成の判別にはいたらない。条痕には，植物性工具によるものと貝殻の腹縁を用いたものとがあるが，特定できた資料は少ない。

C42 ～ C48 は，隆帯が付された土器を一括した。C45 は口縁部に一条の隆帯を貼り付けて，隆帯上を貝殻の背面で押圧し，隆帯の下位に櫛描状の文様が施された土器で，楠廻間式に相当する。口縁部に 1 条の隆帯をもつ土器はほかに 6 点あり，これも楠廻間式に分類される可能性がある。隆帯が断面三角形に調整されたもの（C42 ～ C44）と，隆帯が無調整のもの（C46 ～ C48）とがある。

C49 ～ C91 は，口縁部に粘土紐貼付による細隆帯文を施した土器で，塩屋式にあたる。器面の摩耗のため，隆帯上の施文が特定できた例は限られるが，ほとんどはヘラ状工具を用いたものと判断される。C49 ～ C53 では，横位に複数条の隆帯が貼り付けられ，隆帯上に斜行沈線が引かれる。2 ～ 3 条の隆帯が見いだせ，C50 には斜行沈線，C51 ～ C53 には単方向の刻み，C49 には押圧が施されている。C52 には円孔が穿たれている。C54 ～ C57 は，2 ～ 3 条の隆帯が波状に貼り付けられたもので，C54・C56 には斜行沈線が引かれている。C57 には，波状の隆帯を区画するように，上下に横位一列の隆帯が貼り付けられている。C58 ～ C63 では，口唇部の外面に隆帯を貼り付け，その下位に斜めに隆帯が貼り付けられる。C58 では，口唇部の斜行する隆帯が，下位の横位一列の隆帯にまで達する。C64 ～ C68 は，波状の隆帯貼付によって，菱形の文様が作られている。C69 ～ C74 は，横位一列の隆帯の直下に，小さな波状の隆帯が付される。C74 の隆帯上の施文は，二枚貝の背面による押圧と見なされる。C75 ～ C77 は，隆帯が交差して貼り付けられたもので，交差の様態には斜状（C75）と十字（C76・C77）とがある。いずれも隆帯上には沈線が引かれている。C78 ～ C81 では垂下する隆帯が貼り付けられている。C78 では，垂下する隆帯から隆帯が斜めに貼

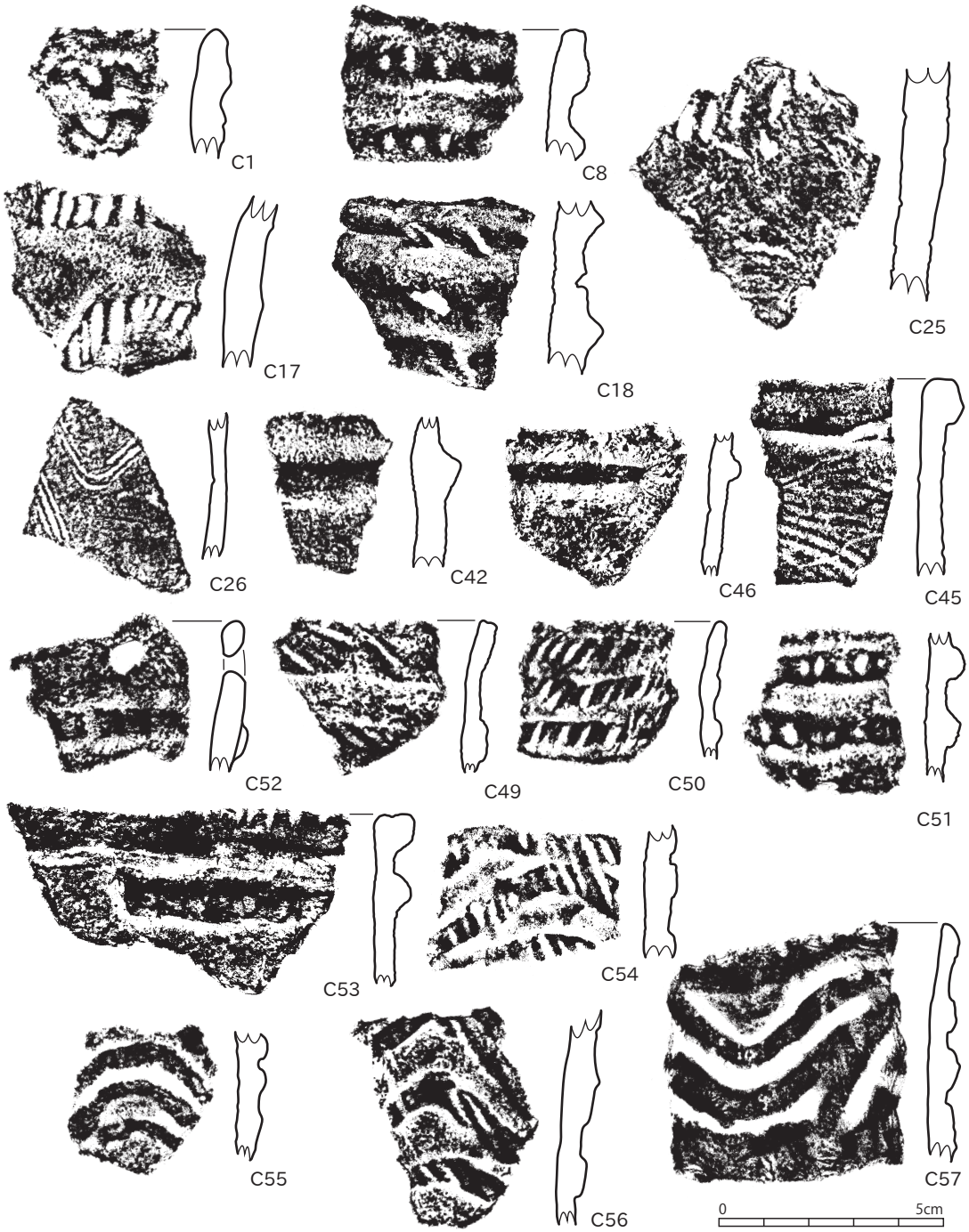


Fig. 4　天神山遺跡の土器（1）　Pottery pieces from the Tenjinyama Site (1)

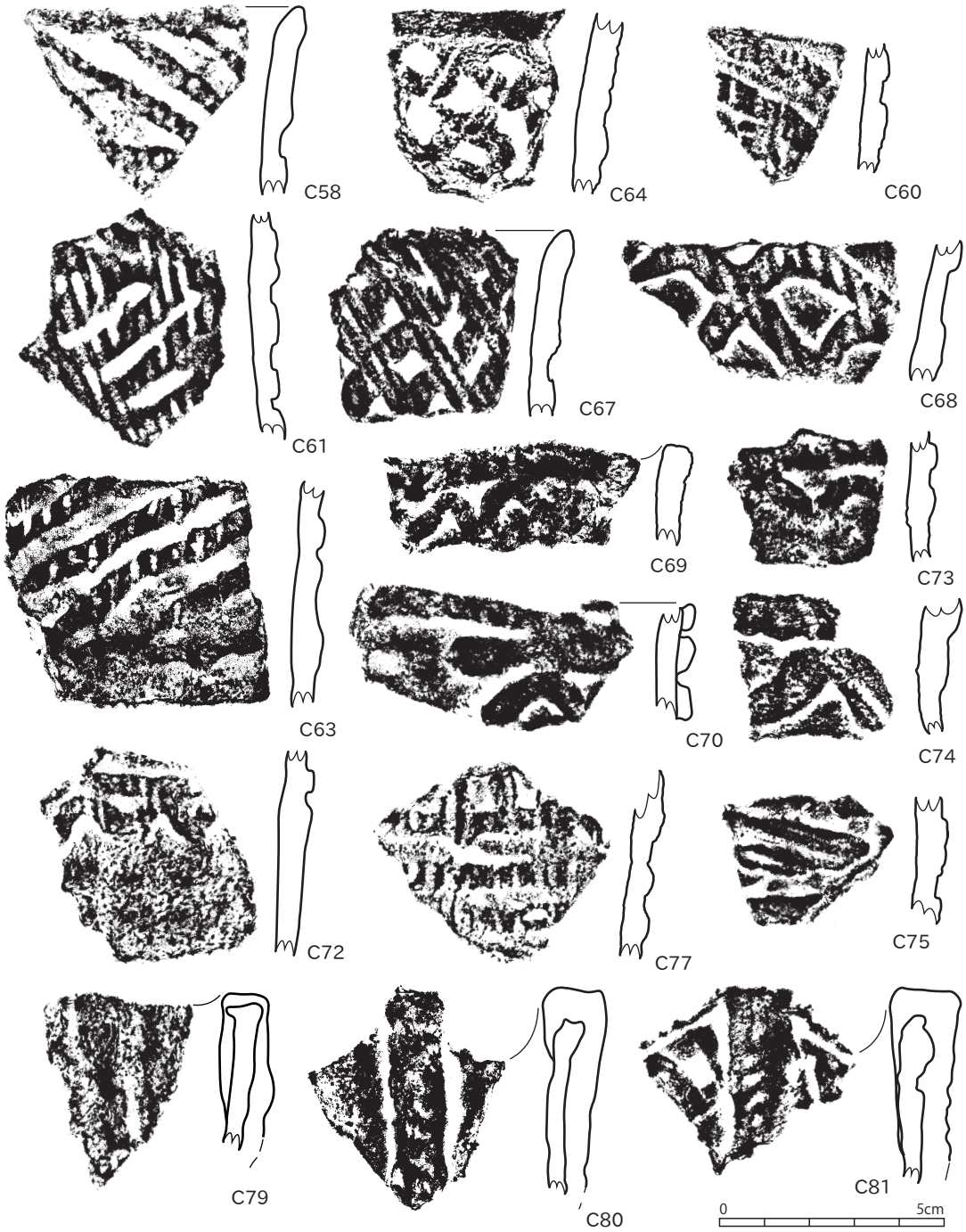


Fig. 5　天神山遺跡の土器（2）　Pottery pieces from the Tenjinyama Site (2)

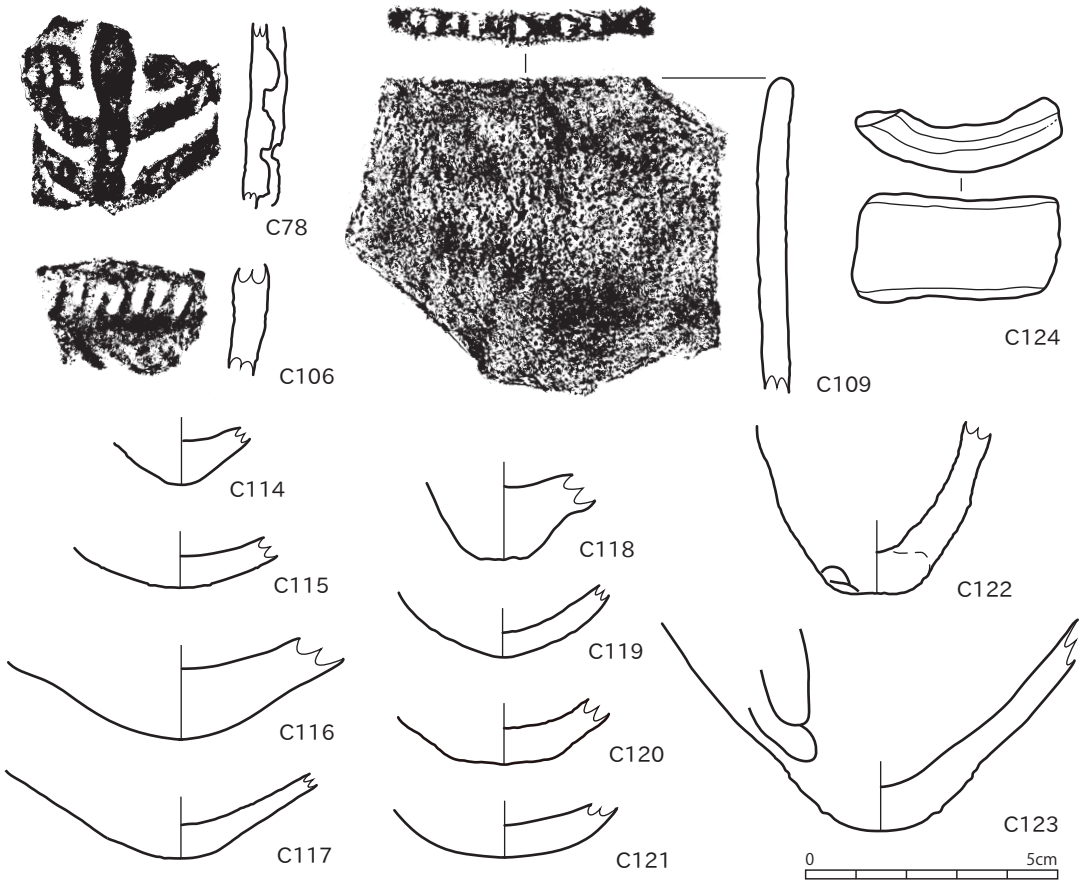


Fig. 6　天神山遺跡の土器と土製品　Pottery pieces and clay object from the Tenjinyama Site

り付けられている。C79 ～ C81 では，波状口縁の波頂部から隆帯が垂直に付され，隆帯上に刻みが施されている。C81 には，交差する隆帯も確認できる。これらのほかに，小片のために文様構成をとらえにくい資料が 233 点ある。隆帯上に施文が確認できないものもあるが（C82 ～ C84），貝殻腹縁による刺突（C85･C86）ヘラ状工具による斜行沈線（C87 ～ C89），貝殻背面による押捺（C90･C91）をもつものもある。

C92 ～ C105 は，土器の胎土に繊維がふくまれる土器である。C106 ～ C108 は沈線文をもつ土器で，型式の特定にいたらなかったものをまとめた。C106 には矢羽状の沈線が施されていて，入海式か石山式に分類できる可能性がある。C109 ～ C113 は，無文の口縁部片で，口唇端部にのみ刻みが施される。平口縁のもの（C109 ～ C111）と波状口縁のもの（C112・C113）とがある。器壁は約 3 ～ 5mm と薄い。C114 ～ C123 は底部片で，C118 では乳頭状の突起が確認できる。

C124 は C トレンチ東端で出土した環状土製品で，両端はやや摩耗した破断面からなる。本来の形状を正円と仮定した場合，半径 30mm 程度の大きさとなる。他の土器と同様，長石片をまじえる胎土で，一部に黒斑を留める。

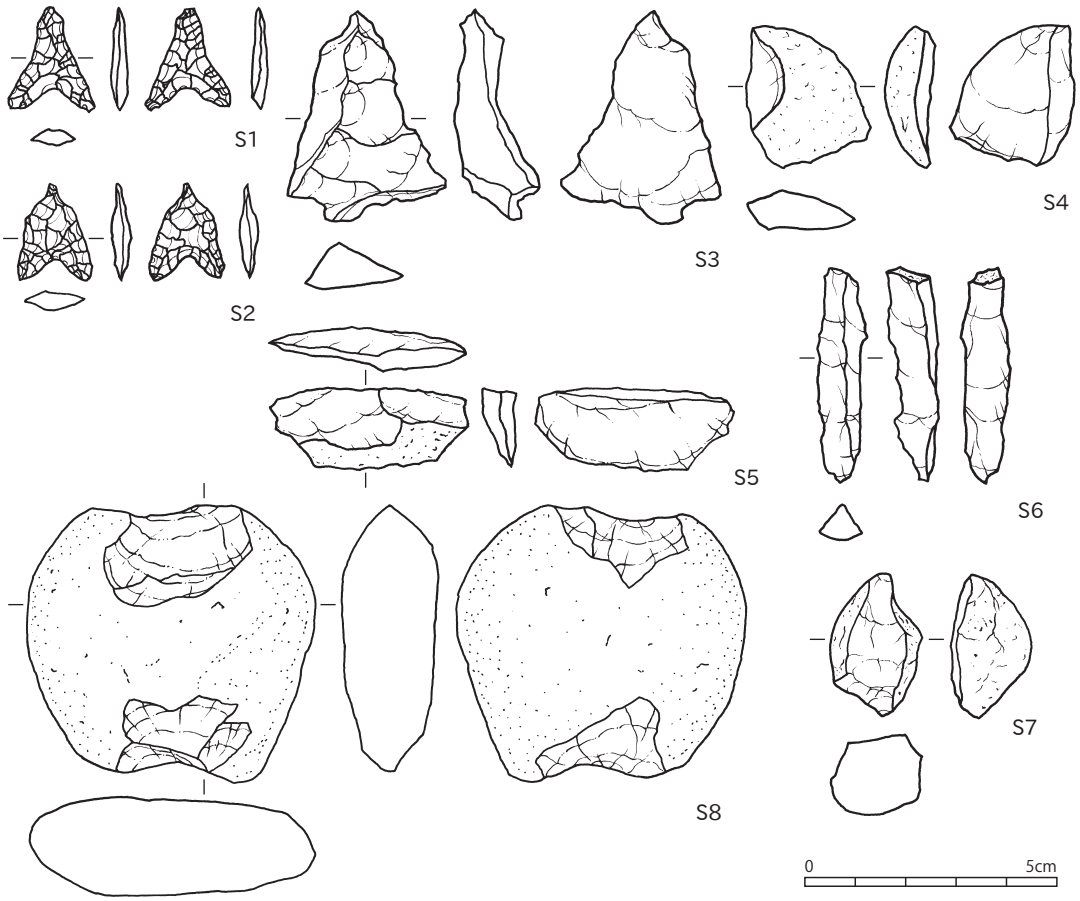


Fig. 7　天神山遺跡の石器　Lithic artifacts from the Tenjinyama Site

（4）石器

S1 は，良質な黒色チャート製の石鏃である。器面を覆う剥離痕からは，実測図右面に対して，左辺のち右辺の順で，先端部側から基部側に進行する二次加工を施したのち，同左面に対して基部側から先端部側へと二次加工を，右辺のち左辺の順で進めたことがうかがえる。基部側の加工はそれに後続し，実測図左面に抉り状の剥離を入れ，同右面に対して細かな整形加工を加える。先端にはわずかに肩をもつが，不整形さや剥離痕の切り合い関係からすれば，欠損した先端を再加工している可能性が考えられる。S2 は，粗粒で灰色を呈する流紋岩を素材とする石鏃で，先端部が錐状に突出する [5)]。どの側縁でも先端部側から基部側に加工が進行しており，両面の切り合いはしばしば錯向関係をとる。基部の抉りには，細かな整形加工の痕跡しか見いだせない。

S3 から S7 は剥片である。S3 ～ S5 は灰色の石英安山岩製で，S3 では，急角度を呈する石核の端部をはつるような連続的な剥離作業がうかがえる。S4 ～ S5 の原礫面からは，円礫を素材とすることが想定できる。S6 は赤褐色の石英岩製で，断面が三角形を呈する角錐様の資料である。S7 は乳白色の石英で，亜角礫が両極打法で分割されたものである。

S8 は安山岩製の打欠石錘で，器面には斑晶の脱落孔が散見される。扁平礫の長軸端に対する両面剥離で，抉り部が作出されている。2 層最下部での出土であるが，今後の参考資料として掲載する。

（5）縄文土器片の分級度と円磨度

Fig. 8 に，3 層および 4 層から出土したすべての縄文土器片の面積を 2 ㎠の級間で示した。両層とも，4 ～ 6 ㎠にピークをもつ単峰性の分布を見せている。

C トレンチにおいて，東から西に 1 ～ 5 区とした地区割と円磨度 R とでは，Pearson の相関係数が 0.62（1％で有意（両側））であった。すなわち斜面上方から下方にむけて，出土する土器片の円磨度 R が高くなる傾向が見られた。

Fig. 9 に，層序および掘削深度ごとの円磨度 R を地区別に示す。3 層に関して，2 区では 15 ～ 20cm，3 区では 20 ～ 25cm，5 区では 10 ～ 15cm に円磨度が顕著に低下する部分が見いだせる。その直上では，円磨度 R が山なりに上昇のち下降する傾向があり，2 区では 0 ～ 15cm，3 区では 10 ～ 20cm，5 区では 0 ～ 10cm が該当する。1 区や 4 区の推移も，この部分に対応すると見なせる。以上の結果は，3 層中に不連続なレンズ状堆積が点在したことを示唆する。

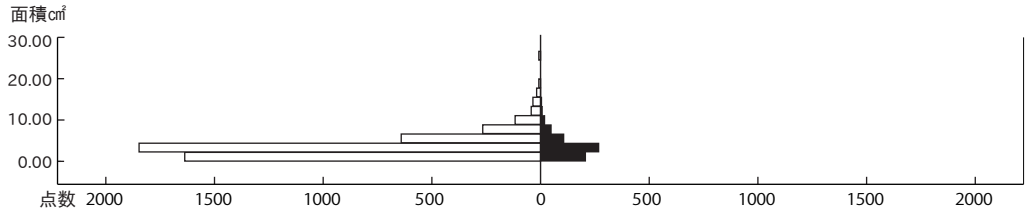


Fig. 8　天神山遺跡の土器片の面積（ヒストグラム）
Histogram of pottery piece's area from the Tenjinyama Site

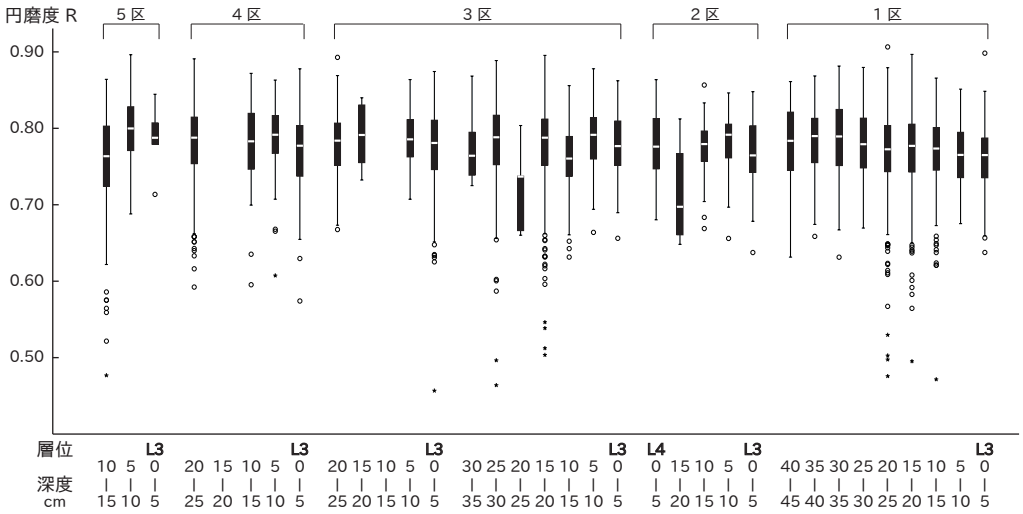


Fig. 9　天神山遺跡の土器片の円磨度　Roundness of pottery pieces from the Tenjinyama Site

5. 天神山遺跡の遺物包含層と遺跡形成

このたびの発掘調査では 12 ㎡とごく限られた部分を掘削したが，C トレンチでは多数の縄文時代遺物が得られた。入海 0 式から塩屋式まで，既存の土器編年をなぞるように連綿と資料が見られるが，型式が判別できる土器片の約 90％が塩屋式である。環状土製品（C124）は南九州との関係が考えられている土製耳飾の一部と考えられ（伊藤 2005，山下 2005），二股貝塚（杉崎ほか 1991）に類例がある。わずか 2 点ながらそれぞれに特徴的な形態をもつ石鏃（S1・S2）は，やはり二股貝塚に類例を求められる。二股貝塚の例に照らして，入海 I 式〜石山式にともなうものと推察され，今回の発掘調査における遺物包含層では客体的な存在と見なせる。

発掘調査で獲得した諸情報は，C トレンチ付近の縄文時代遺物包含層が，斜面上方から供給された堆積物が再堆積して形成されたことを示している。多量の塩屋式にそれ以前の東海条痕文系土器が混入している。単層内での深度の別はもちろん，単層間でも型式との対応関係は見いだせない。堆積物の観察や縄文土器片の画像解析からとらえられた堆積構造は，4 層〜 3 層が一つの堆積サイクルを示す洪水堆積物であることを示唆する。層相ならびに塩屋式を量的主体とする点からは，4 層〜 3 層は 1955 年試掘調査の I・II 層（立松ほか 1983），1956 年本調査の第Ⅱトレンチ第 1 層（小澤ほか 2018）に対比できる [6]。

一方，紅村（1978）が示す 1956 年本調査の遺物と想定される資料にくらべ，今回の発掘調査で得られた土器片は，型式を問わず器面の摩耗が進行している [7]。1956 年本調査区の正確な位置は不明であるが，磯部（1990:71）は「遺跡は段々畑となっており，上二段のほぼ中央に発掘区を設け」たとしているから，筆者らの C トレンチ付近が有力視される。C トレンチの北側は基盤層が岩肌を露出させているため，1956 年調査区は C トレンチの南側，ないしは 1 段下がった西側斜面に設定されたと考えるのが妥当だろう。C トレンチは 1956 年本調査区よりわずかに上方に位置するのであり，両調査区の出土土器片における表面状態の違いは，これらの給源となった本来の遺跡地が幾分広範囲にひろがっていたことを示唆する。現地形から推し量れば，天神山 B 遺跡との間にのびる尾根筋付近がその第一候補となろう。このような想定に立てば，天神山遺跡と天神山 B 遺跡はおろか塩屋遺跡までもが，本来は同一の資料群を構成していたと解釈される。小規模な斜面堆積「遺跡」が近接する現象は，多雨等にともなう非文化的形成過程（Schiffer 1972）の産物と解されるのである。山下（2005）の「天神山塩屋遺跡群」の概念を支持する具体的な遺跡証拠は，天神山遺跡周辺にとどまらず，同様の立地と産状を示す知多半島南部の縄文時代遺跡群に対する問題提起となろう [8]。

現在の地形に照らして，天神山遺跡周辺に想定される集落は「数一〇平方メートル内外」（山下 1997: 51）を凌駕するものの，従来想定されている縄文集落の小規模性（矢野 2016）の範囲を逸脱しないと考えられる。塩屋式期の集落が廃絶に瀕していると見なす根拠はなく，アカホヤ火山灰の降下に伴う海洋資源へのダメージを，塩屋式期における集落の終焉理由とする理解（山下 1987，小田 1993）は支持しがたい。むしろ天神山遺跡における地点間の時期差や，向畑遺跡と新津遺跡第 1 地点との最盛期の不一致が示唆するところは，定着性の高さに裏打ちされた一定の範囲内での移動であり，小規模性を特徴とする縄文時代集落の常態である（矢野 2016）。木島式段階における東海西部系土器の東方進出（池谷 2009）も，被災地からの疎開ではなく，縄文時代前期石器群の定形性と広域性（上峯 2020）が示唆する，情報流動や社会関係の広域化の先駆けととらえられる。

註

1）K-Ah の降下年代と塩屋式土器や木島式土器の年代には数百年の年代差が生じているが（桒畑 2016），K-Ah の影響を長期的に見積もることで，従来の解釈は生き残っている（山下 2005，池谷 2009）。

2）これらの調査区は，当初位置を推定した 1956 年本調査区にかかるように設定したが，過去の調査区を見いだすことはできず，筆者らの推定が誤りであったことが判明した。

3）円磨度指標 R は，地学分野で礫の円磨度区分の指標として多用される Krumbein（1941）の基準と，相関係数 0.937，自由度調整済決定係数 0.874 と，きわめてよく相関する（Takashimizu et al. 2016）。従来の印象図に基づく円磨度判定よりも再現性が高く，省力化もはかれるため，円磨度指標 R の算出を目指した画像解析は，今後の遺跡調査の作業ルーチンにも加えやすい。

4）打欠石錘（S8）は，この角礫集積部分から出土した。

5）S2 の肉眼観察および蛍光 X 線分析によって，この安山岩がサヌカイトや下呂石等，既知の広域流通石材とは異なることを確認している。

6）磯部（1990）は塩屋式の包含層が「最上段」でのみ検出されたとしており，岩野（2002）の記載や川添の調査区復原案（小澤ほか 2018）と相容れない。

7）紅村（1978）が公表している 1956 年本調査の塩屋式土器片を，本稿が示す方法で画像解析すると，円磨度 R の中央値は 0.73 となる。これは Fig.9 に示した値よりも概ね低く，かつ山下（1997）が示す塩屋遺跡の塩屋式土器片を解析した値（中央値 0.71）と近似する。なお詳細は不明であるが，天神山遺跡の 1956 年本調査では魚骨の集積が検出されていて（紅村 1963），同調査区の出土遺物が比較的近傍からもたらされたことを暗示する。

9）山下（2005）が想定するとおり，向畑遺跡および新津遺跡でも「天神山塩屋遺跡群」と同様の遺跡形成過程が考えられる。ただし，現地形からすれば，この理解を敷衍しやすいのは新津遺跡各地点間の関係だろう。

引用文献

池谷信之 2009『黒曜石考古学：原産地推定が明らかにする社会構造とその変化』新泉社。

磯部幸男 1990「天神山遺跡の出土の土偶」『知多古文化研究』6，知多古文化研究会，pp.71-72。

磯部幸男・杉崎　章・久永春男 1965「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41，古代学研究会，pp.1-12。

伊藤正人 2005「耳飾三題―愛知県出土の縄文時代耳飾」『考古学フォーラム』18, 考古学フォーラム，pp.21-36。

岩野見司 2002「天神山遺跡」『愛知県史』資料編 1 考古 1，愛知県史編さん委員会，pp.245-251。

上峯篤史 2020「縄文前期石器群の様相と論点」『東海縄文研究会第 16 回研究発表資料集』東海縄文研究会，pp.21-28。

海津正倫 2001「津島・桑名図幅」『日本の海成段丘アトラス』東京大学出版会 , CD-ROM2。

小澤一弘・川添和暁 2018「南知多町天神山遺跡の調査メモについて」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』19, 愛知県埋蔵文化財センター , pp. 1-8。

小田静夫 1993「旧石器時代と縄文時代の火山災害」『火山灰考古学』古今書院，pp.207-224。

遠部　慎・小林謙一・宮田佳樹 2008「近畿地方におけるアカホヤ前後の縄文土器付着炭化物の年代測定―滋賀県米原市入江内湖の東海系土器群を中心に－」『古代文化』59，古代学協会，pp.544-559。

近藤善教･木村一朗 1987『師崎地域の地質』地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）, 地質調査所。

桒畑光博 2016『超巨大噴火が人類に与えた影響：西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として』雄山閣。

紅村　弘 1963『東海の先史遺跡　綜括編』名古屋鉄道。

紅村　弘 1978『東海先史文化の諸段階（資料編Ⅰ）特装本』私家版。

坂本利弘・岩崎亘典・石塚直樹・デイビッド・S・スプレイグ 2019『小型 GNSS 受信機を用いた高精度測位マニュアル（ドローン用対空標識編』国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構農業環境変動研究センター。

杉崎　章・青木　修・渡辺　誠 1991『二股貝塚』知多市教育委員会。

立松　宏・山下勝年 1983「愛知県天神山遺跡の縄文早期土器（資料紹介）」『古代人』41，名古屋考古学会，pp.51-55。

坪井清足・丹　信實・塚本珪一 1956『石山貝塚』平安学園考古学クラブ。

坪井清足 2002「愛知県の縄文土器との御付合」『愛知県史のしおり資料編 1 考古 1』，愛知県県史編さん委員会，pp.1-4。

福沢仁之 1995「天然の「時計」･「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物」『第四紀研究』34(3)，日本第四紀学会，pp.135-149。

堀内祐花・須賀永帰 2021「南知多町天神山遺跡の縄文土器」『考古学セミナー あいちの考古学 2021 資料集』，愛知県埋蔵文化財センター，pp.49-50。

牧野内　猛 1980「知多半島中・南部の第四系」『軽石学雑誌』6, 万国軽石学会 , pp. 27-40。

増子康眞 1975「縄文文化研究の現状」『東海先史文化の諸段階』私家版，pp.31-61。

増子康眞 1981「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階 本文編・補足改訂版』私家版，

pp.42-97。
町田　洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰―姶良 Tn 火山灰の発見とその意義」『科学』46，岩波書店，pp.336-347。
町田　洋・新井房夫 1978「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ―アカホヤ火山灰」『第四紀研究』17(3)，日本第四紀学会，pp.143-163。
松島義章 1983「小規模なおぼれ谷に残されていた縄文海進の記録」『海洋科学』海洋出版，pp.11-16。
松田博幸 1969「知多半島の地形発達」『東北地理』21, 東北地理学会 , pp. 5-16。
矢野健一 2016『土器編年にみる西日本の縄文社会』同成社。
山下勝年（編）1980『先苅貝塚』南知多町教育委員会。
山下勝年 1987「東海地方西部におけるアカホヤ火山灰効果の影響とその時期」『知多古文化研究』3，知多古文化研究会，pp.1-12。
山下勝年 1997「第 1 編 考古資料 第 2 節 遺跡・遺物 1 縄文時代」『南知多町誌 資料編 6』南知多町誌編さん委員会，pp.27-260。
山下勝年 2005「総括」『楠廻間貝塚』知多市教育委員会，pp.208-229。
山下勝年 2008「東海条痕文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション，pp.146-153。
Krumbein, W.C. (1941) Measurement and geological significance of shape and roundness of sedimentary particles. *Journal of Sedimentary Petrology*, 11, pp.64-72, doi:10.1306/D42690F3-2B26-11D7-8648000102C1865D.
Schiffer, M.B. (1972) Archaeological context and systemic context. *American Antiquity*, 37, pp. 156-1165.
Smith, V.C., Staff, R.A., Blockley, S.P.E., Bronk Ramsey, C., Nakagawa, T., Mark, D.F., Takemura, K., Danhara, T. and Suigetsu 2006 Project Members（2013）Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: Chronostratigraphic markers for synchronising of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. *Quaternary Science Reviews*, 67, pp.121-137, doi:10.1016/j.quascirev.2013.01.026.
Takashimizu, Y. and Iiyoshi, M. (2016) New parameter of roundness R: circularity corrected by aspect ratio. *Progress in Earth and Planetary Science*, (2016) 3:2, doi: 10.1186/s40645-015-0078-x.

Table 2　天神山遺跡の土器・土製品観察表
List of pottery pieces and clay object from the Tenjinyama Site

番号	層位	深度	地区	部位	型式	内面調整	胎土				色調※	
							石英	長石	雲母	繊維	外面	内面
C1	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	入海０		多	多	微		7.5YR4/2	7.5YR4/2
C2	3	20 ～ 25cm	3	口縁部	入海０		多	多			5YR4/3	5YR5/3
C3	3	10 ～ 15cm	1	口縁部	入海Ⅰ		多	多			7.5R3/2	2.5YR4/3
C4	3	15 ～ 20cm	1	口縁部	入海Ⅰ		少	少	微		5YR4/3	2.5YR4/3
C5	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	入海Ⅰ		多	多			5YR4/3	2.5YR4/4
C6	3	10 ～ 15cm	2	口縁部	入海Ⅰ		多	多			2.5YR4/3	2.5YR4/4
C7	3	0 ～ 5cm	3	口縁部	入海Ⅰ		多	多		少	5YR4/2	5YR3/1
C8	3	25 ～ 30cm	3	口縁部	入海Ⅰ		多	多	微		7.5YR5/2	5YR5/2
C9	3	0 ～ 5cm	3	口縁部	入海Ⅱ		多	多		やや多	10R3/3	10R3/2
C10	3	20 ～ 25cm	1	口縁部	入海Ⅱ		多	多			10YR4/2	7.5YR5/2
C11	3	25 ～ 30cm	3	口縁部	入海Ⅱ		多	多	微		2.5YR4/4	7.5YR4/2
C12	3	15 ～ 20cm	3	口縁部	入海Ⅱ		多	多			5P3/1	7.5YR3/1
C13	3	20 ～ 25cm	3	口縁部	入海Ⅱ	擦痕	多	多		少	2.5YR3/1	5YR4/2
C14	3	20 ～ 25cm	3	口縁部	入海Ⅱ		多	多	微		5YR4/2	5YR4/3
C15	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	入海Ⅱ	擦痕	多	多		少	7.5YR4/4	7.5YR5/3
C16	3	25 ～ 30cm	4	口縁部	入海Ⅱ		多	多	微		2.5YR4/3	2.5YR4/3
C17	3	10 ～ 15cm	1	口縁部	入海Ⅱ	指頭押圧	多	多		少	2.5YR4/3	2.5YR4/4
C18	4	5 ～ 10cm	3	口縁部	入海Ⅱ		多	多		多	10YR4/2	10YR5/2
C19	3	10 ～ 15cm	4	口縁部	石山		多	多			10YR6/2	10YR5/1
C20	3	20 ～ 25cm	4	口縁部	石山		多	多			10YR5/2	5YR4/2
C21	5	20 ～ 25cm	3	口縁部	石山		多	多		少	0YR5/5	10R4/2
C22	3	0 ～ 5cm	5	口縁部	石山		微	微	微	少	5YR4/2	2.5YR4/2
C23	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	石山		多	多	微		5YR4/2	2.5YR3/1
C24	3	30 ～ 35cm	1	口縁部	石山		多	多			2.5YR4/4	2.5YR4/4
C25	4	10 ～ 15cm	3	口縁部	石山		少	少	微	多	5YR4/3	5YR4/3
C26	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	天神山	ナデ	微	微			5YR4/3	2.5YR4/4
C27	3	25 ～ 30cm	1	胴部		条痕	多	多	微		5YR4/4	2.5YR4/4
C28	3	20 ～ 25cm	1	胴部		条痕	多	多	微		2.5YR4/5	2.5YR4/5
C29	3	0 ～ 5cm	5	胴部			多	多			7.5YR5/3	7.5YR5/3
C30	3	20 ～ 25cm	1	胴部			多	多			10YR6/3	7.5YR6/3
C31	3	20 ～ 25cm	1	胴部			多	多	微	少	2.5YR5/4	5YR4/3
C32	3	10 ～ 15cm	1	胴部			少	少			5YR5/3	7.5YR5/3

※　コニカミノルタセンシング製 Color Reader CR-13 で測定し，得られた L*a*b* 色空間における測定値を「色出し名人 Pro ver.2.00 for Windows」によってマンセル値に変換した。これを『新版 標準土色帖』の表記に合わせて丸めた。

番号	層位	深度	地区	部位	型式	内面調整	胎土				色調※	
							石英	長石	雲母	繊維	外面	内面
C33	3	15 ～ 20cm	1	口縁部			多	多	微		5YR5/4	7.5YR5/4
C34	4	5 ～ 10cm	3	胴部			少	少			10YR4/1	10YR4/1
C35	4	5 ～ 10cm	3	胴部		指頭押圧	少	少	微		7.5YR5/2	10YR5/2
C36	3	15 ～ 20cm	1	胴部		条痕	多	多	微		5YR5/3	7.5YR5/3
C37	3	20 ～ 25cm	1	胴部			多	多			7.5YR5/3	10YR5/3
C38	3	20 ～ 25cm	1	胴部			多	多			5YR4/3	7.5YR4/3
C39	3	0 ～ 5cm	1	胴部			少	少			7.5YR4/2	7.5YR4/3
C40	3	35 ～ 40cm	1	胴部		指頭押圧	多	多	微		7.5YR3/1	10YR3/1
C41	3	20 ～ 25cm	1	胴部			多	多	微		7.5YR3/1	10R2/1
C42	3	15 ～ 20cm	3	口縁部	楠廻間		多	多			2.5YR3/1	10YR3/1
C43	3	15 ～ 20cm	3	口縁部	楠廻間		多	多	多		7.5YR4/2	7.5YR5/4
C44	3	15 ～ 20cm	1	口縁部	楠廻間		多	多			7.5YR5/2	7.5YR5/2
C45	3	40 ～ 45cm	1	口縁部	楠廻間		多	多	微		5YR4/1	5YR5/3
C46	3	20 ～ 25cm	1	口縁部	楠廻間		多	多	微		7.5YR5/2	7.5YR5/2
C47	3	25 ～ 30cm	3	口縁部	楠廻間		微	微			5YR4/3	5YR4/3
C48	3	0 ～ 5cm	3	口縁部	楠廻間		多	多	微		5YR3/1	5YR4/3
C49	3	10 ～ 15cm	4	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR5/3	5YR5/3
C50	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	塩屋	指頭押圧	多	多	微		2.5YR3/1	2.5YR4/2
C51	3	20 ～ 25cm	4	口縁部	塩屋		多	多			2.5YR4/3	2.5YR4/4
C52	3	20 ～ 25cm	4	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR4/2	5YR4/3
C53	3	15 ～ 20cm	1	口縁部	塩屋		多	多			2.5YR3/1	5YR5/3
C54	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	塩屋		多	多			7.5YR5/3	7.5YR6/4
C55	3	0 ～ 5cm	4	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5YR5/3	7.5YR5/2
C56	3	20 ～ 25cm	4	口縁部	塩屋	指頭押圧	多	多	微		5YR4/2	5YR5/3
C57	3	10 ～ 15cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR3/2	5YR4/2
C58	3	0 ～ 5cm	4	口縁部	塩屋		多	多	微		10YR5/2	10YR4/2
C59	4	0 ～ 5cm	1	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5R4/2	5YR4/1
C60	3	15 ～ 20cm	1	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5YR3/2	10YR3/1
C61	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	塩屋		多	多			7.5YR5/3	7.5YR4/2
C62	3	25 ～ 30cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR4/2	7.5YR5/2
C63	3	0 ～ 5cm	3	口縁部	塩屋	指頭押圧	多	多	微		5YR5/3	5YR4/3
C64	3	15 ～ 20cm	1	口縁部	塩屋	指頭押圧	多	多	微		5YR3/1	7.5YR4/2
C65	3	15 ～ 20cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5YR5/2	7.5YR5/3
C66	3	15 ～ 20cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5YR4/2	7.5YR5/3
C67	3	20 ～ 25cm	1	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR4/2	5YR4/2

番号	層位	深度	地区	部位	型式	内面調整	胎土				色調※	
							石英	長石	雲母	繊維	外面	内面
C68	4	0 ～ 5cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		10YR5/3	7.5YR5/3
C69	3	20 ～ 25cm	1	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR4/1	5YR4/1
C70	3	20 ～ 25cm	4	口縁部	塩屋		多	多			5YR4/2	2.5YR5/4
C71	3	15 ～ 20cm	1	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR5/3	5YR6/3
C72	4	0 ～ 5cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5YR6/3	7.5YR6/3
C73	3	0 ～ 5cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		2.5YR4/1	5YR4/1
C74	3	20 ～ 25cm	4	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR4/2	5YR5/3
C75	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR5/3	5YR5/3
C76	3	20 ～ 25cm	1	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR4/1	10R3/1
C77	3	20 ～ 25cm	1	口縁部	塩屋	指頭押圧	多	多	微		5YR5/3	5YR5/3
C78	4	5 ～ 10cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5YR5/2	7.5YR6/2
C79	3	0 ～ 5cm	4	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR4/1	5YR5/3
C80	3		3	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR4/2	5YR5/3
C81	3	10 ～ 15cm	1	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5YR4/1	7.5YR5/2
C82	3	20 ～ 25cm	4	口縁部	塩屋		微	微	微		7.5YR5/2	7.5YR5/4
C83	3	15 ～ 20cm	1	口縁部	塩屋		少	少	微		5YR4/2	7.5YR4/1
C84	3	15 ～ 20cm	3	口縁部	塩屋		多	多	少		7.5YR5/3	7.5YR5/3
C85	4	10 ～ 15cm	4	口縁部	塩屋		多	多	微		7.5YR4/3	7.5YR5/2
C86	3	15 ～ 20cm	2	口縁部	塩屋		多	多	微		2.5YR5/3	2.5YR5/4
C87	3	25 ～ 30cm	3	口縁部	塩屋		多	多			2.5YR4/1	5YR5/3
C88	5	20 ～ 25cm	3	口縁部	塩屋		多	多	微		5YR5/3	7.5YR5/3
C89	5	20 ～ 25cm	3	口縁部	塩屋	擦痕	多	多			2.5YR4/2	2.5YR3/1
C90	3	0 ～ 5cm	1	口縁部	塩屋	指頭押圧	多	多			5YR5/3	2.5YR5/4
C91	3	15 ～ 20cm	2	口縁部	塩屋	指頭押圧	多	多	微		5YR4/3	5YR5/3
C92	3	20 ～ 25cm	1	胴部			多	多		多	5YR4/2	10RP4/1
C93	3	20 ～ 25cm	4	胴部			多	多	微	多	5YR4/3	2.5YR4/3
C94	3	0 ～ 5cm	5	胴部			少	少		多	7.5YR4/2	5YR4/1
C95	3	10 ～ 15cm	3	胴部			少	少		少	2.5YR4/4	7.5YR5/3
C96	3	20 ～ 25cm	4	胴部			少	少	微	多	7.5YR4/2	2.5YR4/4
C97	3	20 ～ 25cm	1	胴部			多	多	微	多	5YR4/2	5YR4/2
C98	3	0 ～ 5cm	3	胴部			多	多		多	5YR5/4	5YR5/3
C99	3	10 ～ 15cm	1	胴部		擦痕	多	多	微	多	2.5YR4/2	5YR4/1
C100	3	10 ～ 15cm	1	胴部			多	多		多	2.5Y5/2	10YR4/1
C101	4	0 ～ 5cm	2	胴部			少	少	微	多	7.5YR5/3	5YR5/3
C102	3	10 ～ 15cm	5	胴部		擦痕	多	多		多	5YR5/3	7.5YR4/2

番号	層位	深度	地区	部位	型式	内面調整	胎土				色調※	
							石英	長石	雲母	繊維	外面	内面
C103	3	0 ～ 5cm	4	胴部			多	多	微	多	5YR3/1	5YR3/1
C104	3	0 ～ 5cm	1	胴部		擦痕	多	多		多	5YR4/2	5YR5/3
C105	5	20 ～ 25cm	3	胴部			多	多		多	5YR5/4	2.5YR5/3
C106	3	0 ～ 5cm	1	口縁部			多	多	微		2.5YR5/5	2.5YR4/5
C107	3	0 ～ 5cm	2	口縁部			多	多			5YR4/4	5YR6/4
C108	3	20 ～ 25cm	1	口縁部			多	多	微		7.5YR6/3	7.5YR6/3
C109	3	35 ～ 40cm	1	口縁部		指頭押圧	多	多	微		5YR3/1	7.5YR4/2
C110	3	15 ～ 20cm	3	口縁部			多	多	微		7.5YR4/2	10YR5/1
C111	3	15 ～ 20cm	1	口縁部			多	多	微		7.5YR4/1	5YR4/3
C112	3	35 ～ 40cm	1	口縁部			多	多	微		7.5YR4/1	5YR4/2
C113	3	15 ～ 20cm	3	口縁部			多	多			10YR6/2	10YR5/1
C114	3	0 ～ 5cm	4	底部			多	多	微		10R5/5	2.5YR5/4
C115	3	25 ～ 30cm	3	底部			多	多			10YR3/1	7.5YR4/2
C116	3	15 ～ 20cm	3	底部			多	多	微		7.5YR4/2	7.5YR4/2
C117	3	25 ～ 30cm	3	底部			多	多	少		2.5YR4/3	5YR4/2
C118	3	15 ～ 20cm	1	底部			多	多	微		7.5YR4/3	5YR3/1
C119	3	10 ～ 15cm	1	底部			多	多			7.5YR6/3	7.5YR5/2
C120	3	15 ～ 20cm	1	底部			多	多	微		5YR5/5	5YR3/1
C121	3	25 ～ 30cm	3	底部			多	多	微		10R4/4	5YR4/3
C122	3	15 ～ 20cm	3	底部			多	多	微		2.5YR4/4	2.5YR3/4
C123	3	0 ～ 5cm	3	底部			多	多	微		2.5YR5/4	7.5YR5/3
C124	3	35 ～ 40cm	1	土製品			少	少	微		7.5YR5/3	7.5YR4/3

Table 3　天神山遺跡の石器観察表　List of lithic artifacts from the Tenjinyama Site

資料番号	層位	深度	地区	器種	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g
S1	4	15cm ～	3	石鏃	チャート	20	17	3	0.61
S2	3		4	石鏃	流紋岩	19	15	4	0.60
S3	3	5 ～ 10cm	3	剥片	石英安山岩	42	31	9	8.30
S4	3	0 ～ 5cm	3	剥片	石英安山岩	27	24	8	5.11
S5	3	10 ～ 15cm	1	剥片	石英安山岩	16	39	6	3.44
S6	3	15 ～ 20cm	3	剥片	石英岩	43	10	7	2.92
S7	3	15 ～ 20cm	3	剥片	石英	28	18	15	7.68
S8	2	最下部	5	打欠石錘	輝石安山岩	55	57	20	93.91

写　真　図　版

Plates

A トレンチの作業風景　Scenery of the excavation at A-tr.

図　版　目　次　Index of plates

Plate 1

1. 天神山遺跡の位置と周辺の地形（東から）
   Geological Location of the Tenjinyama Site from E.
2. 天神山遺跡と周辺の縄文時代遺跡の立地（東から）
   Geological Location of the Tenjinyama Site and other Jomon sites from E.

Plate 2

1. A トレンチの堆積物（完掘時 , 南から）
   All sediment of A-tr from S.
2. B トレンチの堆積物（完掘時 , 南から）
   All sediment of B-tr from S.

Plate 3

1. C トレンチの堆積物（調査終了時, 1～3 区 , 北から）
   All sediment of east part of C-tr from N.
2. C トレンチの堆積物（調査終了時, 3～5 区 , 北から）
   All sediment of west part of C-tr from N.

Plate 4

1. C トレンチの調査状況（東から）
   Scenery of the excavation at C-tr from E.
2. C トレンチの遺物出土状況
   Occurence of artifacts at C-tr.

Plate 5

縄文土器（入海 0 式（上ノ山Ⅱ式）, 入海Ⅰ式 , 入海Ⅱ式 , 石山式）
Pieces of Jomon pottery (Irimi-0 type (Uenoyama-II type), Irimi-I type, Irimi-III type and Ishiyama type)

Plate 6

縄文土器（天神山式等 , 楠廻間式等）
Pieces of Jomon pottery (Tenjinyama type, Kusubasama type and relevant ones)

Plate 7

縄文土器（塩屋式）
Pieces of Jomon pottery (Shioya type)

Plate 8

縄文土器（塩屋式）
Pieces of Jomon pottery (Shioya type)

Plate 9

縄文土器（繊維土器 , 沈線文土器 , 口縁部片）
Pieces of Jomon pottery (Fiber-tempered pottery, Grooved line patterned pottery and rim parts)

Plate 10

縄文土器（底部片）と土製品および石器）
Pieces of Jomon pottery (Base parts), clay object and lithic artifacts

1. 天神山遺跡の位置と周辺の地形（東から）
Geological Location of the Tenjinyama Site from E.

2. 天神山遺跡と周辺の縄文時代遺跡の立地（東から）
Geological Location of the Tenjinyama Site and other Jomon sites from E.

1. A トレンチの堆積物（完掘時 , 南から）
   All sediment of A-tr from S.

2. B トレンチの堆積物（完掘時 , 南から）
   All sediment of B-tr from S.

1. C トレンチの堆積物（調査終了時 , 1 ～ 3 区 , 北から）
   All sediment of east part of C-tr from N.

2. C トレンチの堆積物（調査終了時 , 3 ～ 5 区 , 北から）
   All sediment of west part of C-tr from N.

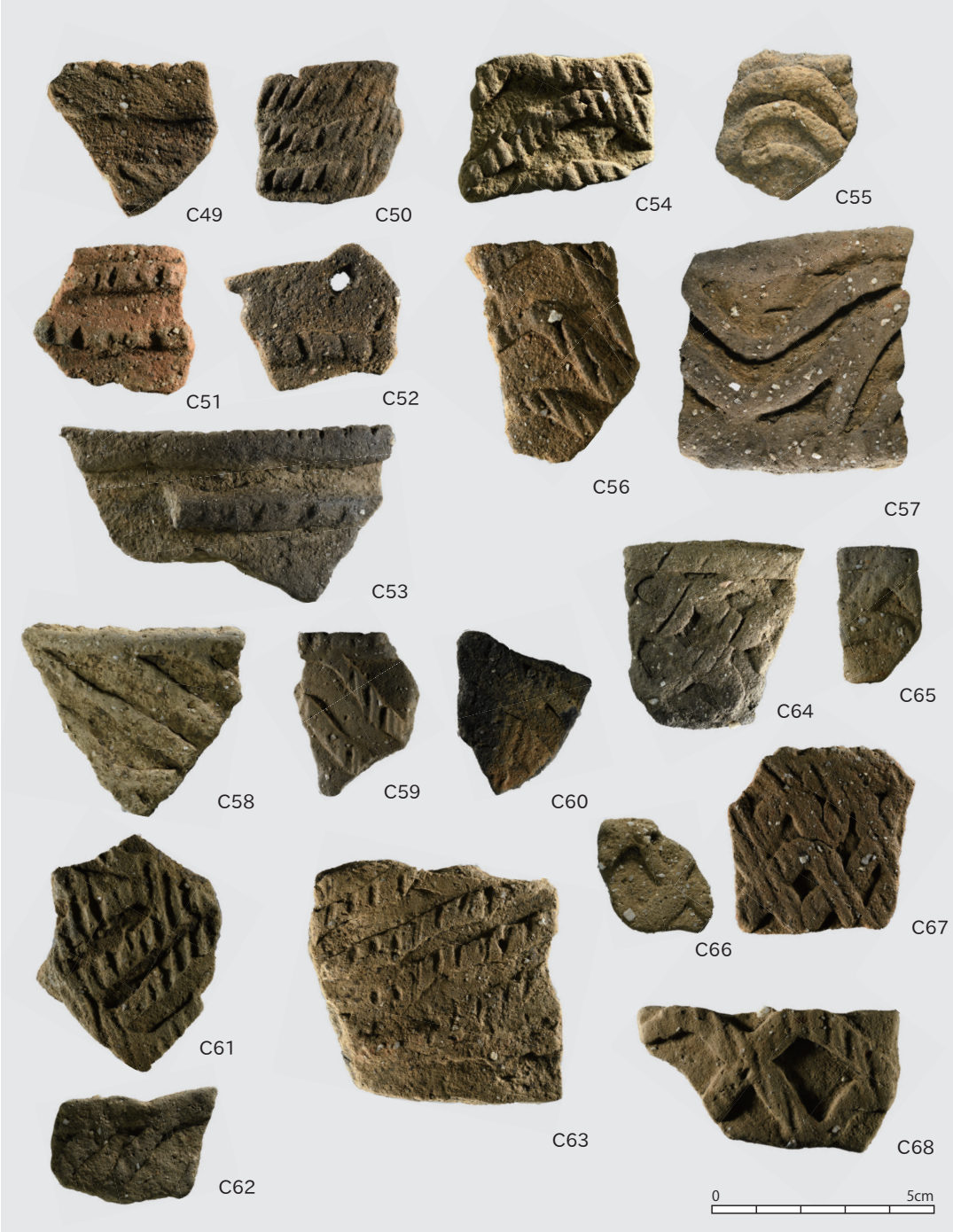
1. C トレンチの調査状況（東から）
   Scenery of the excavation at C-tr from E.

2. C トレンチの遺物出土状況
   Occurence of artifacts at C-tr.

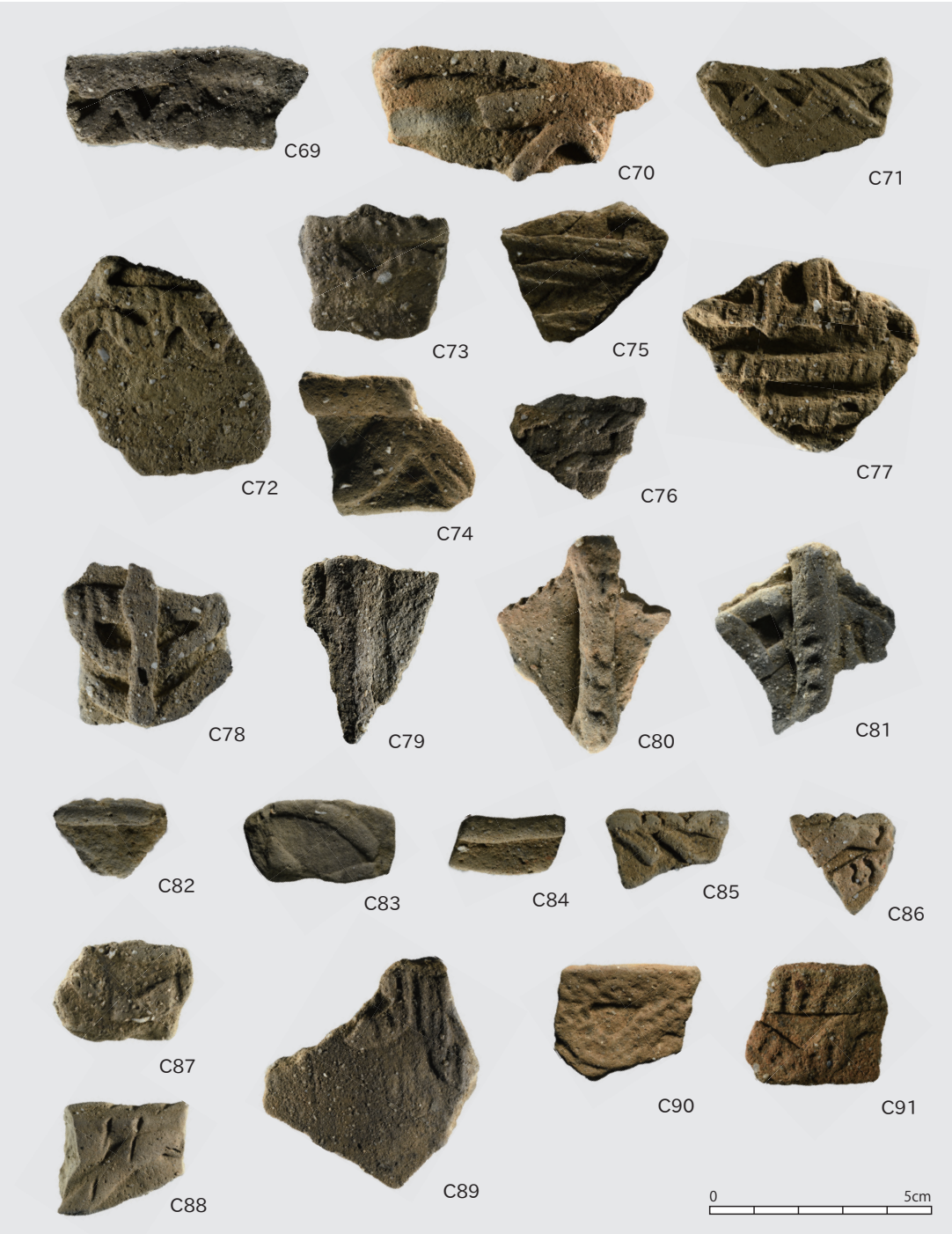
縄文土器(C1 ～ C2 入海 0 式(上ノ山Ⅱ式), C3 ～ C8 入海Ⅰ式, C9 ～ 18 入海Ⅱ式, C19 ～ C25 石山式)
Pieces of Jomon pottery (C1 to C2 Irimi-0 type (Uenoyama-II type), C3 to C8 Irimi-I type, C9 to C18 Irimi-II type, C19 to 25 Ishiyama type)

縄文土器（C26 ～ C41 天神山式等 , C42 ～ C48 楠廻間式等）

Pieces of Jomon pottery (C26 to C41 Tenjinyama type and relevant ones, C42 to C48 Kusubasama type and relevant ones)



縄文土器（塩屋式）
Pieces of Jomon pottery (Shioya type)



縄文土器（塩屋式）
Pieces of Jomon pottery (Shioya type)

縄文土器（C92 ～ C105 繊維土器 , C106 ～ C108 沈線文土器 , C109 ～ C113 口縁部片）
Pieces of Jomon pottery (C92 to C105 Fiber-tempered pottery, C106 to C108 Grooved line patterned pottery, C109 to C113 rim parts. These types are unidentified.)

縄文土器（C114 ～ C123 底部片）と土製品（C124）および石器（S1 ～ S8）
Pieces of Jomon pottery (C114 to C123 Base parts), clay object (C124) and lithic artifacts (S1 to S8)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	てんじんやまいせき
書 名	天神山遺跡
副 書 名	縄文時代前期初頭の発掘調査
編 著 者 名	上峯篤史（編）, 加藤大智，堀内祐花
発 行 機 関	南山大学 上峯篤史研究室
所 在 地	〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 南山大学人文学部人類文化学科
電 話 番 号	052-832-3111（代表）
発 行 年 月 日	2022年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査目的
		市町村	遺跡地図番号					
てんじんやまいせき 天神山遺跡	あいちけんみなみちたちょう 愛知県南知多町 おおいにゅうどう 大井入道	234451	480042	34°43′19″	136°57′38″	20210722 ～ 20210808	12.00	学術研究

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
てんじんやまいせき 天神山遺跡	包 蔵 地	縄文時代	－	土器（入海０式，入海Ⅰ式，入海Ⅱ式，石山式，天神山式，楠廻間式，塩屋式，環状土製品），石器（石鏃，剥片，打欠石錘）	塩屋式土器を主に包含する水成堆積層を検出。

要 約

縄文時代早期後葉から前期初頭（ca. 8400 ～ 7000 cal BP）は，完新世初頭の海進（縄文海進）が進行していることに加え,南九州で発生した鬼界アカホヤ噴火（ca. 7300 cal BP）の影響を被っていると予想され，遺跡の消長や集落の構造，物資の移動に注意が払われてきた。本研究では，愛知県南知多町に所在する天神山遺跡の発掘調査から，この問題にアプローチした。天神山遺跡は知多半島南部に位置し，新第三紀層が作る小丘陵の斜面上に，遺物包含層が残されている。1956 年の学術発掘調査では東海条痕文系土器の諸型式が層位的に出土し，東海地方西部やその周辺地域における，縄文時代早期後葉から前期初頭の土器編年の確立に寄与した。ただしその詳細は公表されておらず，当時の発掘調査区の場所さえも不明である。

今回の発掘調査では，遺跡の東縁部から斜面に沿って三つのトレンチを設定した。斜面上方の二つのトレンチ（A･B）では現代の廃棄物を包含する堆積物の直下から新第三紀層が検出され，縄文時代の堆積物は流出したと考えられた。斜面下方の C トレンチでは，前期初頭の塩屋式土器の細片を多量に含む黒色土層が検出された。堆積物の観察や土器片の分級度，円磨度の分析から，これらは斜面上方からもたらされた洪水堆積物と判断された。これらの遺物を残した人類集団の居住域は，斜面上方の尾根線付近に営まれたと推定され，尾根線をはさんだ東側に立地する天神山 B 遺跡，塩屋遺跡も同じ由来をもつ資料群と見なされる。遺跡の規模や動態は西日本の縄文時代遺跡に通有のものと想定され，知多半島南部の前期初頭の集落に鬼界アカホヤ噴火による深刻な影響を見いだすのは適当ではない，と判断される。

愛知県南知多町
天神山遺跡
－縄文時代前期初頭の発掘調査－

令和４（2022）年１月31日　初版第１刷発行
令和４（2022）年３月31日　初版第２刷発行

編　　集　上峯篤史
発　　行　南山大学上峯篤史研究室
〒466-8673
愛知県名古屋市昭和区山里町18
南山大学人文学部人類文化学科
TEL 052-832-3111（代表）
https://researchmap.jp/7000011331

ISBN978-4-600-01009-6 ©Atsushi UEMINE, 2022 Printed in Japan